
魔法先生ネギま！～屍の主～

なっちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜屍の主〜

【Nコード】

N3560P

【作者名】

なっちゃん

【あらすじ】

主人公が死んでネギまの世界に転生？本来いない人物がいる事で一体どんな風に変わって行くのか、それは見てからのお楽しみ。

注意点（前書き）

この小説を読むための注意点

注意点

作者は話を考えるのが苦手なため、おかしい点やここおかしいだろなど様

々な事があるので感想等で書いてもらえると嬉しいです。

他にも色々御都合主義など文才がなくてもいいなら見てください

更新ペースは作者が気が向いたら書くので期待はしないで来だ

さい

作者はネギま！は八巻屍姫はガンガンで途中から見ました、

好きなキャラは屍姫の北斗です

あとこの小説にこう言うのがたりないなど感じた時も感想等で書いてもらえると思います

注意点（後書き）

頑張っていきたいと思います

第1話 プロローグ（前書き）

前回の投稿からどんな風に話を進めれば良いのか考えていて一週間考えていたので遅れました。

今後と同じ様に遅れる場合があるので優しく見守ってください。

第1話 プロローグ

P i P i P i P i P i P i P i P i
P i P i

「うーん、もう朝なのか寝た気が全然しなくなつて此处どこ!」

自分の周りを見ても、床と天上の繋ぎ目がわからないくらい真っ白の場所にいた

「おはようやつと起きたね、やっぱり下界の人間を起こすには目覚まし時計だね!あれで起きると目が覚めるし何より音のバリエーションが色々あるから良いよね。」

いきなり目の前に現れた青年みたいな男は目ざまし時計のことを語っていた

「あなたは一体誰ですか?」

「ああ俺、まあ下界の人間からしてみたら神様かな。」

「へ?何でその神様が此处にいるの?」

「あゝそうか君はまだ自分の状況が解つてないか」

「状況?」

「そうそう、さっき君は何で俺が此处にいるのかって聞いて来たけどそれは違つただね、正確には何で俺はこんなところに居るんで

すか？だ。」

「えっじゃあ此処はどこなんですか？」

「そうそうその言葉が聞きたかったのだよ。」

「は、はあ」

「反応が薄いな〜そんなんじゃないぞ！まあいいかじやあ早速、ここは君の様な人間やその他の生きているものがいた世界を管理する世界だよ！」

「え〜とそれはつまりどうゆうことで？」

「まあ要するに此処に雨をたくさん降らせようとか、この人は良い人だから良い事が起きる様に幸せをあげたりだとか世界の全ての事柄を操る世界だよ」

「えっなんで僕はそんなすごい世界にいるんですか？」

「実は君に関する人生の情報があつて君が死んじゃったんだよね〜」

「・・・え〜〜〜〜！！僕もう死んでるんですか！」

「そうなんだよ、だから転生させるから此処に呼んでそれを教えようと思つて」

「転生つてあの輪廻転生の転生？」

「そうそう、まあ普通の転生は記憶ごと初期化されるけど君の場合は特別に記憶は消されないから安心してね、あと転生先はこっちが勝手に決めてネギま！の世界にしたから」

「なんかドンドン話が進んでいくなつてゆうか神様が何でネギま！の事を知ってるんですか！とゆうかネギま！は主人公のネギが麻帆良にきて教師をするぐらいしか知らないし」

「此処は世界を管理してるからそんな情報はあつて当然原作知らなくてもまあ関わる様にするから大丈夫」

「はあ、わかりましたもう良いです」

「他には此処はあくまで世界を管理する世界だから記憶を残して転生させるので精一杯だね君の能力とか潜在的力はほぼランダムだから、まあ念のために君の記憶にあるキャラクターを君の力になる様に送るから」

「ちなみにそのキャラは誰ですか」

「それは見てからの・お・た・の・し・み・それじゃあ逝くよ」

「逝くよの字違いますかそれにどうやって？」

ニヤ「そりゃあこうして」パチン

「何で下に穴が~~~~~！」

「いつてらっしや~い」

第1話 プロローグ（後書き）

今日暇で自分の小説の情報を確認し既に5件もお気に入りに入っておりとても焦って投稿しました。

既に前回の注意書きの所で書き方に指摘が有り頑張りました。

作者が成長する様にこの調子でドンドンダメな点を書いてください。

ステータス的な物（前書き）

このステータス欄は話が進むにつれて更新する予定です。

*更新 1 2 / 3 1 1 1 : 2 2

ステータス的な物

ちよつとF a t e風にしてみましたw

名前：一之瀬翔いちのせ しょう

容姿：髪と目は漆黒で髪の長さは腰の辺りまで伸ばしているストリートロング、呪いのせい体が弱く余り外に出なかったので筋肉は付いておらず肌も白い、見た目も男よりどちらかと言えば女に近い。

身長：126cm

体重：32キロ

属性：善

筋力：D (S) ・ ? 魔力：S

耐久：E (EX) 俊敏：D (S)

幸運：F ・ ? ? ? 宝具：A

保有スキル

呪いの子：A

代々一之瀬の家系で稀に生まれる子で、常に呪われている体質で、呪に吞まれて短命である。

呪の才：A

子供の頃から呪術を血反吐を吐く思いで修行したため、今では体に掛かる呪を抑える事に成功し、長生きが出来る様になった。

呪の解除：B

初めて見た呪も、時間と必要な物さえあれば、必ず解ける。

呪いの転移：A

他人の呪いなどを他の人物に移し替える技術

陰陽術：C

陰陽術を使える用になるスキル呪の勉強ばかりしていて余り陰陽術は上手くない。

呪の同調：B

自分の任意で呪を自分の体に馴染ませるもの、使ったあと呪の強さで一時的に後遺症を出す。

宝具

名前：呪包刀じゅほうとう

ランク：A

種別：対人

レンジ：1

最大補足：1

？能力：刀を鞘から抜くには呪に掛かっていないと無理で、刀を鞘から抜くと力を発揮し、刀が吸う魔力に比例して持ち主に掛かっている呪を吸う、そしてその吸った呪をその刀に付属させる事が出来る。

例

抜いている間は、超人的な力と技術、など

名前：北斗^{ほくと}

容姿：屍姫の北斗をそのまま小さくした容姿で、まだ子供なので胸は平原状態。

身長122cm

体重30キロ

属性：混沌

筋力：EX ? 魔力：D

耐久：EX ? 俊敏：EX

幸運：E ? ? 宝具：EX

宝具

名前：未練と妄執

ランク：EX

種別：対人

レンジ：1

最大補足：1

能力：屍姫と同じ様に、人の本質を見抜く事ができる、他には吸血鬼並の再生力がある

ステータス的な物（後書き）

ステータスでも良いから連続投稿しようとしたけど書いてる内に日付が変わってしまっていた作者ですw

今回はFate風に主人公のステータスが書きたいな〜と思い勢いで書きました。

この後の2話はなるべく早く書こうと思っているので応援おねがいします！

第2話 転生（前書き）

読みにくいと思いますががんばって書きました。
誤字などがあったら報告おねがいします！

第2話 転生

こんにちは！一之瀬翔いちのせ しょうです。

僕が生まれた家庭は関西呪術協会と言う物に組しているらしく、それなりの地位を持っているらしい、家族構成は父母兄と自分の4人家族で、家も家と言うよりも屋敷に近く、父の趣味なのか巫女服姿の人達が毎日働いている。そして生まれてから早6年いろいろな事があった。

最初は生まれつき体が弱く余り外で遊ばしてもらえない事だった、前世の記憶では子供の頃は元気に遊んでいたのでその分虚しかった、隠れて外に出ようとしても巫女の人達に捕まり部屋の中の布団に寝かされるしまつ。

他には自分は呪の子と言われる物で、一族に稀に生まれてくる子らしくあまり良い話がないらしい、常に呪われている子だとか、呪に吞まれて早く死んでしまう短命の子だとか。

なぜそんな事を知っているかと言うと、3歳の頃に陰陽術の修行を始めた時に異様にスパルタ気味に教えられるので何かおかしいと思いい父に聞いて見たら、自分は呪の子だと教えてくれた。

父の話を書いて目の前が真っ暗になった気がした、自分はまだこの世界で何もしていないし、自分を産んで育ててくれた父母に恩返しすらしていないのに死ぬという事、しかし父の話によれば、昔呪の子の中でも呪術に優れた人が長生きしているらしく呪を制御出来れば長生きが出来る　という事だ、その話の後に父に今まで以上に修行がしたいと言った。

最初は陰陽術の基礎を学び、次に呪術の知識を詰め込み、今度は実際に物に対して呪を掛けて自分の実力を付け、最後には自分に呪を掛けてもらい呪に対する耐性を付け血反吐を吐く勢いで修行した、前世でも味わった事の無い苦しみで実際に血も吐いた、そんな修行をしている内に今では関西一の呪術使いといわれるまでになった。

今までの話を聞いている分にはこれなんてチートとか思うけれど実際は、体は少しは運動ができる様になったが呪いのせいで体は弱く、呪術ばかり修行していたので陰陽術も基礎中の基礎しか出来ず、1人では雑魚妖怪を足止めするのが精一杯と言う貧弱ぶりだ、まあ呪術に関してはチートなので呪関係の仕事しか僕には来ない。

そして今日はなんと関西呪術協会の本山からの仕事らしく今は車で移動中です。

「父さん今日の仕事ってどんな事をするの？」

「なんでも本山の蔵の中から出てきた刀の呪をどんな物が見て欲しいそうさ」

「あれ？それぐらいなら他の人でも簡単に出来ると思うんだけど？」

「ああ、しかし本山の者に調べさせたがどんな呪が掛かっているのか分からないそうさ、唯一わかる事は特定人物しか鞘からむ抜けならしい、そこでお前の出番だ」

「しかし刀の呪を調べるのは自分の部屋でするのに刀を借りてくるのになぜ僕まで行くのですか？」

「実は関西呪術協会の会長の近衛詠春様にはお前と同一年の娘さんがいてな、本山では余り遊び相手がいないらしく遊んでくれないかとの事だ」

「はあ・・・」

「まあ本山に付いたら挨拶をしてその刀を受け取った後に永春様の娘さんと遊べば良いだけだ、お前も毎日修行していたからな、少しは子供らしく無邪気に遊べ」

父は微笑みながら僕の頭を力強く撫でた、父は良く頭を撫でてくれる流石に前生の記憶があり恥ずかしくもあるが父になでられるのは大好きだった。

本山に付くと巫女服姿の人達に広間に通され少し待っていると奥から眼鏡を掛けた温和そうな人が来た。

「初めまして関西呪術協会会長の近衛詠春です」

「初めまして僕の名前は一之瀬翔いちのせしやうです今回蔵から出てきた刀を調べるために預かりに参りました」

「では早速刀を持って来させますね、すみませんあの刀を持って来てください」

永春様が刀を持って来てくれと言ったら襖を開けて巫女の人刀を持って入って来て自分の前に置いた。

「それは蔵の奥からでて来た物で誰が何時作ったのか分からないですよ、それに禍々しい程の呪なのにその刀を持ってても何も起こらない、本山の中では手の出し用がないので貴方を関西一の呪術師と見込んで呪を調べて見てくれませんか？」

「はい！未熟な身ですが精一杯やらして頂きたいと思います。」

「ありがとうございます、じゃあ少し君の父と話をするのでその間私の娘と遊んでいてくれませんか？」

「はい！」

「すみません、翔君を木乃香の所へつれていってくれませんか？」

「わかりました、それでは翔様こちらへ」

永春様が刀を持って入って来た巫女の人に案内をたのみ自分はその巫女の後に続いた。巫女の人の後に付いて行くと広い庭に出た、庭の中心辺りには2人の女の子が居て自分の存在にきずきこちらを見て笑顔でもう1人の子を引っ張ってきた

「ねえねえ一緒にあそばへん」

それが彼女近衛木乃香と桜咲刹那との初めての出会いだった。

第2話 転生（後書き）

これからもこんな感じで行きたいと思います。
よろしくね！

第3話 初めての原作キャラ（前書き）

ちなみに一之瀬翔は登場キャラが誰なのか覚えていません（呪術の修行が忙しすぎて忘れたと言っ事で）

*修正しました！12/30

毒舌家さん御指摘ありがとうございます。

第3話 初めての原作キャラ

「ねえねえいつしよにあそばへん」

和服姿で髪は黒く腰まで伸びている女の子がいきなり遊びに誘ってきた。

「このちゃん、しよたいめんのひとはあいさつせな」

このちゃんと呼ばれる女の子に手を引かれて来た胴着姿の女の子が、少し焦りながら初対面の人とは挨拶しないと云った。

「そうやな！うちは、このかっていいますっ！よろしゅうな、ほら！せつちゃんも」

このかちゃんが、胴着姿の女の子の背中を押して自分の前に持ってきた。

「あ、えっと、せつなです、さくらざきせつなです」／／／

せつなちゃんは、恥ずかしいのか顔を赤くして少し俯いて挨拶した。

「僕は一之瀬翔いさのせ しょうですよろしく、このかちゃん！せつなちゃん！」

僕がこのかちゃんとせつなちゃんの名前を呼ぶとこのかちゃんは目をキラキラ輝かせ、せつなちゃんはさらに顔を赤くして俯いた。

「よろしくね！しょーくん！それじゃあさっそくあそばへん？」

「うん！遊ぼうか」

そして僕とこのかちゃんとせつなちゃんの3人で時間を忘れるぐらい遊んだ。

――――

「それでは詠春様、木乃香様、私たちはこれで」

夕方になると父と詠春様がやって来て父が帰ると言った

「しょうくんまたあそぼうな」

「しょうくんまたこんどな」

このかちゃんは眠たいのか少し目を擦っていて、せつなちゃんは最初は少し緊張して喋っていたが、遊んでいる内に段々と緊張が溶けて行き今では碎けて喋る事ができる様になった。

「私からもお願いします。」

「はい！次来た時も一緒に遊びたいと思います」

「それはそれは、君が次くる時が楽しみですね。」

そうして次に来た時も一緒に遊ぶ約束をして父と一緒に帰った。

――
帰りの車の中で父に今日の遊んだ時の話をした。

「今日は楽しかったか？」

「はい！今日は同年の子と始めて遊んでとても楽しかったです。」

「そう言えばお前に言っておかないといけない事があるんだ。」

「言わなければならない事とは？」

「今言うのは遅いのだが詠春様は木乃香様に裏の事を隠して育てるらしくてな、木乃香様には裏の事はばれない様に接して欲しいんだ」

「はいわかりました父さん」

「そう言えば今日渡してもらった刀はどうだ？」

「一目見ても普通の刀の様に見えましたが鞘の隙間から禍々しい程の呪が溢れてました。やはり特定の人物にしか鞘から抜く事は出来ず、抜いた時に発動するタイプの物だと思います。」

「さすが翔だな一目見ただけでそこまで判るとは」

「しかし父さんあの刀に一体どんな呪が掛かっているのか見当がつきません、あれぐらいの禍々しい程の呪が刀に掛かっているのに刀を持って何も起こらないなんてちょっと興味を引きますね」

「そうか、まあ興味を引かれるのはわかるが余り無茶をするなよ」

「はい！父さん」

その後家に帰った後に家族と一緒に夕ご飯を食べその後風呂につくり入って自分の部屋に入った

既に自分の部屋の中にはあの刀が机の上にあった

「それじゃあさっそくやりますか」

~~~~~1時間後~~~~~

「あゝもうダメだ、何だこの刀の呪禍々しい呪なのに全然体に影響が無いとかどんな呪なんだ？」

うゝん少しだけ鞘から抜けるか試してみるか？あつてもその前に念のために解呪用の道具を用意しておいてと。

それじゃあいきます！

シャ〜

「あれ以外とらしく、うっやば」

チャキン

「危な！」

刀を鞘から抜いた途端に自分の体から魔力などこっそり持っていかれビックリしすぐに刀を鞘に納めた。

体に変な事起ってないかな？一用調べとこうかな？はあ？なんでこんなに呪が軽くなってるの、もしかしてこの刀が魔力とか呪を吸収したのか？たしかに今まで吸ってきた呪が溜まったんならこの禍々しさも頷けるしな。

まあ今は魔力をたくさん吸収されて疲れたから明日にしよう。

そして僕の原作キャラとの初めての出会いは終わった。

### 第3話 初めての原作キャラ（後書き）

あごさん感想ありがとうございました。

御指摘の部分は修正しました。ありがとうございました！

#### 第4話 神様との再会（前書き）

自分は今回は少し強引だった気がするー！

\* 12 / 30 7 : 12

あごさん報告ありがとうございました

## 第4話 神様との再会

P i P i P i P i P i P i P i P i  
P i P i

「もう朝なのか、全然ね「アニヨハセヨ〜〜〜！」またあなたですか。」

「いやあ、久しぶり！6年8ヶ月と13日ぶりだね！〜」

「細かいですよ神様、まあ久しぶりです。しかし神様は、この世界には干渉出来ないはずでは？」

「そうそうそれ！そのフリを待っていたんだよ！君は空気が読めるね！」

「神様のそのテンションの高さもお変わりなく。」

「まあその話は置いて、まあ干渉する気は無かったんだけどね、君を生まれてから見てただけだね〜、少しだけ教えておこうかなっと思つて。」

「何をですか？」

「何をつて、君が抜いたあのまか不思議な刀の事だよ！」

「あの刀の事ですか？あれって一体どんな刀なんですか？自分には見当が付きません。」

「はっはっは！やはり君でも分からなかったか！まああれは君の専門外だからね。」

「専門外？あの呪を帯びているのに？」

「まあまずはあの刀の事を話さないと、あの刀は呪包刀じほうとうと呼ばれる物で本来呪を帯びていなかったんだよ。」

「えっでもあの刀は呪を帯びてい「まあまあ、最後まで聞いて。はい・・・」

「それでね、あの刀を抜くにはね、呪が掛かっている者にしか扱えないんだよ、そして刀を鞘から抜くと魔力を吸収してその魔力に比例して呪を所持者から吸うんだ、そしてその吸った呪を、その刀に付属させる事が出来るんだ。まあ呪の吸いすぎで、本来の力を発揮出来て無いけどね。」

「どうしてですか？」

「例えば、キャンバスの上に水性の絵の具で絵を書くでしょ、一つの絵ではどんな絵なのかわかるけど、それを何回も何十回も塗りつぶして行けば、最終的にはどんな絵なのか分からなくなるのと同じさ、いろんな呪を吸収している内にどんな呪の効果なのか分からなくなるなっただけだよ。」

「それじゃあ使えないんじゃない？」

「大丈夫！大丈夫！呪は君の専門でしょ！その刀に吸収されている、ごちゃごちゃになった呪を一つの大きな呪に君が変換すれば良いんだよ！」



「ただどあの刀は詠春様に掛かっているもので、結局は返さないといけないぞ?」

「大丈夫!大丈夫!俺が何とかするから!」

「わかったよ、神様の言葉を信じて詠春様にあの刀を貰えるか聞いてみるよ。」

「そうだよ素直になれば良いんだよ!君は呪しか力がないんだから!それともう一つ君に伝える事があるんだよ。」

「伝える事?どんな事ですか?」

「ほら、君が転生させる時に、君の力になる子を送るって言ったじや無い?」

「はい、僕の記憶の中にあるキャラクターですよね?」

「まあその子なんだけどね、そろそろ君の所に来るから楽しみにしていてね」

「まあ、神様が言っただからとっても楽しみにしていますね。」

「よし!これで君に伝える事は無いからな、そろそろ起きるし、ここらでお別れだ!」

「はい」

「じゃあ、君の事はいつでも見てるから、がんばってね。」

神様の言葉を聞いて僕の目の前が段々と真っ黒く染まって行っ  
た。」

#### 第4話 神様との再会（後書き）

今回でステータスの方を、更新、修正しました。  
暇があつたらみてね！

## 第5話 報告！（前書き）

がんばって2連続で書いて見ました

## 第5話 報告！

「翔様、起きて下さい」

「んあ、・・・おはようございます。あれ？どうしたんですか？」

「いつも起きられる時間になっても、翔様が起きて来られなかった  
ので、起こして来てくれと頼まれました。」

「へっ、今何時ですか？」

「只今は、7時25分です」

「ちょっと寝すぎましたね」

やっぱり昨日の刀に、たくさん魔力を吸われ過ぎたせいかな。

「翔様、そろそろ朝食の御時間ですが。」

「あっはい、今いきます」

-----

「おはようございます、父さん、母さん、兄さん、遅れてすみませ  
ん。」

「おはよう翔、昨日遅くまで起きてるから早く起きれないんだぞ。」

「まあまあ洋一そんな事言わんと、でも翔も早く寝ないと。」

「おはよう翔、ご飯を食べるから早く座りなさい。」

「はい父さん。」

そのまま家族と楽しく朝食を取り、兄が高校へ行った。そして昨日の夢で刀の力を把握した事を、神様の事は話さない様にして、言った。

「呪包刀か・・・翔はその刀の扱い方がわかるのか？」

「はい！昨日試しに刀を鞘から抜いて見たら、魔力と呪を吸われまして、その後寝た時に夢で見ました。」

「そうか、まあ一用詠春様に報告するが、また今度行く時には翔がちゃんと報告しないといけないぞ。」

「はい！他にも何かないのかあの刀を調べて見ますね！」

-----

一週間後

「こんにちは、詠春様、木乃香様、今日はこの前報告した事についての詳細を報告しに来ました。」

「しょうくん、はやくいつしょにあそぼう」

「木乃香、少し翔君とお話があるので、刹那君と遊んで待っていてくれないかな？」

「え〜、それじゃあ、おと〜さま、はやくおはなしおわらして〜な。」

このかちゃんは僕と遊べないのが不満らしく頬を膨らまして言った。

「しょうくん、あっちのひろばであそんでるから、はよきてな〜」

そう言うところのかちゃんは、今まで空気だったせつなちゃんを引っ張って行った。

「それじゃあ早く終わらせますが、では此方で。」

詠春様に続いて一つの部屋に入って向かい合う様に座った。

「それでは、報告御願います。」

「はい！え〜と、あの刀の名前は呪包刀と呼ばれる物で、呪をその身に宿していないと抜けない物らしく、抜いた瞬間に持ち主の魔力を吸い、その魔力に比例して呪を吸うものです、そしてその吸った呪を刀に付属させる事が出来るらしいです。」

「そうですね、ご苦労さまです。しかしこんな短期間で呪はおろか刀の名前までわかるとは。」

「いえ、実は少し刀に興味を持ちまして、試しに刀を抜いて見たら抵抗もなく抜けて、その日の夢でこの刀の名前と力を見たんです。」

「なるほど、それは興味深い。」

「それと、実は詠春様に頼みたい事がありました。」

「何ですか？頼みたい事は？」

「はい、実はあの刀を譲って欲しいのです！」

「あの刀ですか・・・」

詠春様は目を瞑って少し考えた後に答えた。

「良いでしょう、扱える者が居るのに、使わないなんてもつたい無いですからね。」

「ありがとうございます！」

「それじゃあ報告も終わった事ですし、木乃香達の所に遊びに行つて下さい。」

「はい！失礼しました。」

その後は前回と同じ様にこのかちゃんとせつなちゃんと帰るまで遊んだ。



## 第5話 報告！（後書き）

もう少いで新年ですが、まだまだ書く気持ちはあるので楽しみにしていて下さい。

## 第6話 初めての剣術（前書き）

話の展開が早い気が・・・

## 第6話 初めての剣術

どうも、一之瀬翔です。呪包刀を譲って貰ってから約2ヶ月、僕は今道場の真ん中でぶっ倒れています。どうしてぶっ倒れて居るかと言うと、あれは呪包刀を譲って貰って家に帰った時に、さかのぼる。

~~~~~二ヶ月前~~~~~

「翔、ちよつと良い？」

「はい母さん、どうしたんですか？」

「健示^{けんじ}さんに、詠春様に刀を譲って貰ったて聞いてね」

ちなみに健示^{けんじ}さんとは、父さんのことだ。

「それでどうしたんですか？母さん」

「いやね、せつかく刀を持っているんだったら、神鳴流^{しんめいりゅう}習わない？」

「神鳴流ですか？」

たしかに、刀の力で全体的な能力を上げても、刀も扱った事のないんじゃ宝の持ち腐れだしな。

「はい！習って見たいです。」

「じゃあ早速道場へ」！

「え！？母さんだれが神鳴流て誰が教えるんですか？」

「それはね、お母さんが直接教えてあげるよ！」

「母さんて神鳴流が出来るんですか？」

母さんは毎日ゆったりと過ごしていて、流石に神鳴流なんて、扱えないと思ってたし。

「も、翔ちゃんたら、お母さんがそんなに信じれないの？流石に斬魔剣 弐の太刀とかは無理だけど、大抵は使えるよ。」

「お母さんってお父さんと結婚するまでどんな事してたんですか？」

「ん、色々あったけど、太刀を持って妖怪相手にブイブイ言わせてたのよ。」

「じゃあお母さん御指南お願いします。」

「よろしい！ちなみに修行中は師匠と呼ばないとだめだよ、それじゃあ早速道場行くわよ。」

「はい！母さん」

~~~~~

そして母の修行が始まってみれば、母は飴と鞭の扱いがうまく、自分の限界ギリギリまで修行し休憩を何回も繰り返した。

普通は木刀などで型を繰り返し体に馴染ませるのだが、荒技で呪包刀の力で、呪を少し弄くり鞘から抜いている間だけ、達人クラスの腕にする様にして型を繰り返し、体に馴染ませた。

ちなみに呪包刀に吸わせる魔力を増やせば呪包刀の力をたくさん引き出せる事が分かった。そして呪包刀の使用可能時間が最小限で30分最大出力で5分と確認出来た。

そして現在魔力と体力切れで道場の真ん中でぶっ倒れています。

「翔ちゃん健示さんが後でくる様にだつて。」

「はい・・・わかり・・・ました」

————父の書斎————

「父さん何か用ですか？」

「ああ実は少青寺に呪を封印している場所があるんだけどね、最近封印が脆くなつて来て翔にやつてもらいたって依頼が来てるんだよ。」

「どんな封印ですか？」

「古すぎて分からないから、向こうでどんな封印が効くのか調べて封印して欲しいんだ。」

「それは難しい事を、何日か向こうで泊まると思いますが良いですか？」

「大丈夫だよ、出発は明日だから早く寝なさい。」

「はい父さん、失礼します」

そして僕は明日の依頼のためにいつもより早く寝た。

## 第6話 初めての剣術（後書き）

ようやく次回お助けキャラ登場です！楽しみにね

## 第7話 お助けキャラ？（前書き）

今回で神様が主人公の力になると言っていたキャラが登場です。  
ちなみに作者はそのキャラが好きです。



## 第7話 お助けキャラ？

こんにちは！一之瀬翔です。僕は今、昨日父さんが言っていた、少青寺に居ます。そして現在進行系で、その呪が封印されている場所に、向かっています。

「すみませんね、わざわざ遠い所から。」

「いえいえ、これも修行だと思つて、精一杯やらして頂きます。」

「いや、若いのにしっかりしてますね。・・・と此処ですね、今回依頼した封印して欲しい場所は此処なんですが。」

案内人に連れられてやって来た場所は、少青寺の裏の山にある洞窟の中で、目の前には、頑丈そうな少し錆びた鉄の扉があった。扉の至る所には、古ぼけて所々文字が読めなくなった、呪符が貼つてあった。

（しかし、一番凄いのが、こんなに大量に呪符が貼られているのに、扉の隙間から流れ出る禍々しい気配、呪包刀が持っている、呪をも凌駕する禍々しさ、一体どんなのが封印されているのか、想像する事すら出来ない。）

「すみません、此処に封印されている物って一体どんな物ですか？」

「えーと、寺にある文献に書かれていたんですが。曰く、存在自体が呪いの様な物らしく、日本中の陰陽術師を集めて、やっと封印できたらしい、と。」

「そんな物を一人で封印できますか！」

「いえ、100年前は一人で封印を掛け直した記録がありますので、なんとか出来ると思います。……」

「……まあ全力でやらして貰います。呪符は古くなりすぎてどんな風に封印したのか分からないので、現在の封印に、さらに重ねて封印します。」

そう言つて僕は、洞窟を戻った。

「あれ？封印しないんですか？」

「流石に初めての見た封印で、同じ封印が出来ないので、自分が使える中で、どれが効くか調べるために、一旦戻ります。」

「あっそうですね。じゃあ戻りますね。」

そして僕はどんな封印が効くのか考えながら帰った。

-----

あれから一日、僕は自分が泊まる寺の縁側で、お菓子を食べながら、どんな封印が効くのか考え中だ。

「んー、これじゃ効果が無いし。こっちじゃこんなに封印したら、自分の魔力が足りないし。それならいつそ新しく一からつくるか、頑張れば今日中にできるか？」

じー

「頑張れば今日中にできるか？え〜と、此処の魔力運用率と抵抗率をなるべく少なくして使用魔力を減らして・・・」

じーーーーー

「此処をこうして・・・」

じーーーーー

「え〜と、ここを・・・あの〜気が散るんで見ないでくれま・・・せん・・・か・・・」

新しい封印の術式を考えていたら、前方から物凄い視線を感じて、止めて欲しいと言おうとして顔を上げると、なななんと屍姫の北斗が居るじゃないか。

## 第7話 お助けキャラ？（後書き）

年越し前に投稿する事が出来ました。少し急ぎすぎて雑になったか  
もしれませんが、楽しんでくれてくれたら幸いです。

## アンケート実施

あけましておめでとうございます！新年で心機一転したいと思うので、何個かアンケートを実施しま〜〜す。

1、やっぱり「」の前に人の名前入れたほうがいいですか？

2、〴〵saidみたいに入れた方が良いでしょうか。

3、もう少し描写をいれたほうがいいですか？

4、やっぱり木乃香や刹那の恋愛はありだね。

文字数の関係で少し雑談です。

しかし此処まで、お気に入りにしてもらえるとは思いませんでした。  
お気に入り37

週間アクセス2103

他の所と比べると、少ないかもしれませんが、作者にとってはとても嬉しいです。

これからお気に入り数、週間アクセス数が、増える様に頑張って

行きたいです。

いやゝしかし、北斗が可愛いよゝ、あの無邪気な行動がいいよね。

## 第8話 懐かれた？（前書き）

前回から遅れてすみません！

少し話の構成をどうするかで迷ってしまい遅れました。

今まで見て来た様に御都合主義ばかりですが、楽しんで見て下さい！

## 第8話 懐かれた？

こんにちは！一之瀬翔です。現在僕は屍姫の北斗と一緒に布団で寝ています。何で一緒に寝てるのかと言うと、あれは北斗と出会った時に戻ります。

~~~~~

（ななななんて北斗が此処にいるんだ！北斗は確か屍姫の世界のはずだろ！どうしてこんな所にい・・・神様かゝ！^{あいつ}確かに北斗は好きなキャラだけどいきなり過ぎないか？）

少しの間心の中で、そんな事を考えてふと北斗を見る。屍姫では左目から頬にかけて北斗七星の徴を宿していて、裾と袖口が朽ちた巫女装束に身を包んでいたが、今は着ているものは同じだが、身長が自分よりも少し小さく、体も身長に合わせてスレンダーになっている。て、おまけに北斗七星の徴を宿していない。

そのままずっと北斗を観察していると、北斗が手を伸ばしてきて僕の頬を触ってきた。

最初は片手で触れるか触れないかの位で触っていたが、段々と触れる面積が増え最後には両手で挟んで覗き込んできた。

最初はいきなりの登場で脳がフリーズしていたが、頬を触られているうちに、脳の起動が出来た。

「あのゝ少し頬を触るのを止めてくれませんか」

「・・・？」

北斗は僕の言葉が分かったのか、コテンと音がなる様な仕草で頭を傾け頬を触るのを止めた。ちなみに翔は北斗が頭を傾けた仕草を見て少し可愛いと思った。

「貴方に聞きたい事があるんですが、美味しいお菓子などありますか？」

「・・・おいしい？」

北斗はなんの意味なのか理解していないのか、頭を傾けながら言った。

（うーん、屍姫の様に知識が全然ないのか？）

そんな事を考えながらどうすれば美味しいの意味が伝わるのか考えた。

「えーと、おいしいって言うのは、食べると幸せになる事なんだよ。」

「・・・幸せ？」

「幸せはね自分の体が満たされて行く事なんだよ。」

「・・・満たされる？」

「例えば、誰かとお話ししたり、誰かと一緒にご飯を食べたり、誰かと一緒に眠ったり、後は好きな人と一緒に過したりとか？」

「・・・お話し?」

「そうお話し、ほらこっちに座って。」

僕が隣に座る様に催促すると、北斗が隣に座った。その後は色々な話をしたり、一緒に折り紙などで遊んだりして夜まで時間を潰した。

~~~~~

今は夕ご飯と一緒に北斗と食べている。

「箸の持ち方が違うよ、ほらこう持って。」

「・・・?」

北斗は今まで箸を使った事がないのか、箸を片手で握り締めて食べようとしていた。

(やっぱり箸の持ち方はすぐには無理か。)

「ほら口を開けて。」

箸の持ち方が分からない北斗にご飯を食べさせた。その後も一緒にお風呂に入り、一緒に寝た。

今日一日中、北斗と過してて北斗が全然知識が無い子供の様な存在と言う事が分かった。今からちゃんと常識を教えれば屍姫の様に人を殺さなくなると思った。

~~~~~

その後封印されていたのが北斗と分かったが、父さんと母さんに頼み、監視と言う建前で北斗を養子にとった。

それから北斗に常識等を教えて、一緒に過して行った。一緒に勉強したり、一緒に風呂に入ったり、一緒にご飯を食べたりほとんどを北斗と過ごす様になった。

第8話 懐かれた？（後書き）

こんにちは、なっちゃんです。

いやゝ前回のアンケートの返事を見たけど、以外に受けてるんですねゝ

前回のアンケートで、北斗もヒロインですよなって帰ってきましたが、無論そのつもりです。

他にも一人考えてるんですが、よく考えたらハーレムになってね！とちよつと悩んでるこの頃。

まあそんな事は考えずに、自分が行きたい道に行くので、生暖かい目で見守って下さい。

第9話 パートナー（前書き）

キャラ崩壊あるかも知れません。

「．．．はい」

「可能性としてはやっぱり翔君の呪のせいかな。．．．．んゝ
ゝそうなる。．．前鬼と後鬼が出せないから翔ちゃんは神鳴流の
人に護衛を頼むかしら。．．．．そうだ！北斗ちゃんに翔ちゃん
の護衛を頼みましょう！」

母さんが1人で色々と喋った後、いきなり北斗を自分の護衛をさせ
ようと提案を出した。

「え！？母さん！？」

「大丈夫よ北斗ちゃん意外と強いし、翔ちゃんにずっと一緒に居る
から護衛にはもってこいよ」

確かに北斗の戦闘能力は物凄かった。

最初は母さんがどれくらい強いか確認する為に、屋敷の神鳴流の人
と試合をさせたところ、一撃で沈めてしまった。

やはり屍姫の様に凄い怪力と戦闘センスを持っていた。

最初は何も知らない子供の様だったけど、常識を教え続けた事で、
今では屍姫の様な性格ではなくなったので、護衛をさせるには丁度
いいだろう。

「あの．．．．．母さん、流石に北斗のいない所で勝手に話を進
めたら．．．」

「じゃあ今から北斗ちゃん呼ぶから2人で話し合ってね。北斗ちゃ
ん入ってきて」

「え！ちよつ！母さん！」

「は〜い」

母さんの呼ぶ声に答える様に北斗が部屋に入って来た。

「それじゃあ後の話は翔ちゃんに任せるから、2人でゆっくり話し合ってね」

そう言つと母さんは部屋をそそくさと出ていった。

「しょう話つて何？」

「実は北斗に頼みたい事があつてね」

「頼みたい事？」

北斗は頭をコテンと横に傾けた。

「え〜と、話すと長くなるけど」

〈少年説明中〉

「・・・てな感じで、北斗に守って貰いたいんだけど」

「やる！！しょう守る！！」

守って貰いたいと北斗に頼むと、北斗はすぐに返事をした。

「じゃあこれからよろしく北斗！」

第9話 パートナー（後書き）

前回の投稿から時間が掛かったものにもものすごい短いし。

第10話 初めての (前書き)

やってしまったが後悔はしていない。

第10話 初めての

どうもこんにちは、一之瀬翔です。

現在僕は西洋魔法の勉強中です。

何故陰陽術を使う僕が西洋魔法を勉強しているのかと言うと、前衛で戦う北斗と後衛で支援する戦い方が西洋魔法の魔法使いと従者の関係に似ており、西洋魔法の従者に魔力を供給する事の出来るパクティオーの術式を真似して擬似的に縁えんを繋げ、北斗に靈氣ルンを供給する術式を作る為である。

靈氣を北斗に供給する事ができれば、戦闘能力の上昇と物凄い回復能力が手に入る計算だ。

「しかし、西洋魔法も意外と使えるな。この術式とか陰陽術に組み込めばより少ない魔力で高出力だもんな。まあまずは靈氣を北斗に供給する術式を作らないと」

あれはこうして、こっちはこうで、此処と此処を繋いで……

A 10x10 grid of dots forming a triangular shape. The first row has 10 dots, the second row has 9 dots, the third row has 8 dots, and so on, down to the tenth row which has 1 dot. The dots are arranged in a right-angled triangle with the right angle at the top-left corner.

「ん〜、大体は完成したかな。意外にパクティオーの術式が複雑だから時間掛かったな〜」

「……………翔」

「うひゃ！ほ、ほくと！いつから後ろにいたの！」

いきなり後ろから声を掛けられ、今まで出した事が無い様な声を上げてしまった。

「しょうが1人でぶつぶつしゃべり始めた頃から」

北斗が言うには術式を考え始めた頃からずっと後ろで見ていたそう
だ。

（と言うか独り言をずっと北斗に聞かれてたの！恥ずかし〜！今までで一生の不覚）

「それで北斗は僕にどんな用があるの？」

独り言を聞かれた事を頭の隅に寄せて北斗に用事があるか聞いて見た。

「うん、しょうに用事が有って来た」

そう言うと北斗が目の前までやって来て……………

「えい！」

思いつき押し倒された。

「・・・・・・・・へ？ちよ、北斗！一体どうしたの！」

「？しようとキスする為？」

北斗は僕の言っている意味がおかしいかの様に言った。

「ふ、普通はキスなんてしないよ！」

「？しょうの母さんにパートナーはキスしてなる物だっ！て言っていたよ」

おか〜〜さん！なんて事北斗に吹き込んでるんですか！北斗本気でキスするつもりですよ！

「ちょ！北斗さん！少しま むぐっ?!」

北斗の行動を止めようと声を出した瞬間に北斗の唇で僕の口を塞がれた。

「.....くちゅ.....ちゅば.....ちゅる.....」

「ッー!!」

考える暇もなく唇を割って北斗の舌が侵入してきた、慌てて舌で押し返そうとしても器用に舌を絡めてきて口の中を蹂躪して行く。

「・・・・・・・・ぷはっあ、はあ、はあ、ほくと、ちよつとまッー!!」

苦しくなったのか北斗が唇を離れた隙に止めて欲しいと言おうとす

るが、喋っている途中でまた口を塞がれる。

口を塞がれているせいで段々と酸素が頭に回らなくなり、この状況を何とか脱出しよう？押し返そうにも北斗の方が力が強いため逆に押さえ付けられ、唇を離して息をしてまた口を塞ぐ行為をされ続けた。

「・・・・・・・・くちゅ・・・・・・・・くちゅ・・・・・・・・ちゅば・・・・・・・・ちゅる・・・・・・・・」

「んっ！・・・・・・・・んんっ！！・・・・・・・・んっ！！！！！！！」

段々と北斗の舌の動きが激しくなり口の中を激しく舐め回す。

前世でもディープキスは初めてで、キスの快感で何にも考えられなくなる。

「・・・・・・・・くちゅ・・・・・・・・くちゅ・・・・・・・・ちゅる・・・・・・・・」

北斗が唇を話すと僕の唇と北斗の唇を透明な唾液の橋が掛かっていてとても官能的だった。

「これでしょうのパートナー」

そう言うとき北斗は僕の上から立ち上がると何処かへ行った。

「はぁ、はぁ、はぁ」

北斗が去ってから呼吸を整え立とうとするが、足元がおぼつかず中々立ち上がる事が出来なかった。

結局その日は何もやる気が起きずそのまま一日を過してしまった。

~~~~~

「はあ〜」

布団に入って隣で寝ている北斗を見ながらため息をついた。

（．．．．．北斗意外にキス上手だったな、はっ？！何考えてるんだ僕！でももう一回ぐらい良いかな）

北斗ともう一度キスをして良かったかと思いつつ、何となくインパクトのある一日は終わった。

〜おまけ〜

「北斗ちゃん！パートナーになるにはキスをするんだよ！」

「キス？」

「そう！キス！まずは押し倒してから翔ちゃんの口の中に舌を入れて口の中を舐め回すんだよ。その後は息継ぎしながら翔ちゃんの抵抗が無くなるまでキスを繰り返すのよ！」

「？はい」

「意外に翔ちゃんMだと思うからどんどんいってね！」

「じゃあ早速キスしてきます」

「行ってらっしゃい……ふふふこのまま行けば孫を見るのも早いからね」



## 第10話 初めての (後書き)

初めてこんなシーンを書いたのでうまく書けたのか微妙です。  
というか母親暗躍w

## 外伝 北斗が来る前の話（前書き）

今回はあまり話の進行に関係無い物を書いてみました！

## 外伝 北斗が来る前の話

今日は久しぶりに木乃香ちゃんと刹那ちゃんと遊ぶ日で、いつもは楽しみなんだけど何故か今日はいやな予感がする。

そんないやな予感を感じながらも本山に付き、早速庭で遊んでいる木乃香ちゃんと刹那ちゃんの所へ向かった。

いつも遊んでいる庭に付くと、木乃香ちゃん達は庭の近くの縁側に座ってお手玉をしていた。

「あー！しょーくんや！しょーくん！はやくこっちにきてあそぼー！」

一早く僕の存在に気づいた木乃香ちゃんは早く遊びたいのか大声で呼んだ。

僕も早く2人と遊びたいので駆け足で2人の近くへいった。

「おはよう木乃香ちゃん、刹那ちゃん」

「おはよう！しょーくん！」

「おはよう御座いますしょうくん」

「さっきまでお手玉してたの？」

「そうやで！しょーくんがくるまで、おてだましてな、いまからなにするかきめるんや！」

「これからか」

木乃香ちゃんの言葉で考える。

初めての会ってから色々な遊びをした。鬼ごっこ、隠れん坊、色々坊や、蹴鞠など色々な遊びをした。

（ん～どんな遊びが良いかな～）

じ～～～

（ん！）「どうしたの木乃香ちゃん？」

「いやな、しょ～くんで、よくみたら、女の子みたいな顔、してるおもつてな」

木乃香ちゃんが僕の顔をじ～と見つめるので、聞いて見たら女の子みたいな顔と言った。

「ほんとや！しょくんで女の子みたいな顔や！」

木乃香ちゃんの言葉で興味を持ったのか刹那ちゃんが顔を見て木乃香ちゃんに同意した。

「・・・そうや！いいことおもいついた！」

木乃香ちゃんが少し唸っていたが、何か閃いたらしく手を叩いた。

「「おもしろいこと？」」

「うん！しょくんに女の子の格好させたらかわいいんとおもっ

よ  
」

僕と刹那ちゃんの声に答える様に木乃香ちゃんは満面の笑みで爆弾発言をした。

「え！つちよ！木乃香ちゃん冗談だよね！」

「じょうだんいわへんよ、せつちゃん！しょうくんをかくほや〜  
！」

「は！はい！」

ダッ！

回れ右をして逃走する音

ガシッ！

刹那ちゃんと木乃香ちゃんにつかまれる音

「しょうくん！にげるなんていややわ〜」

「ちよっ！このかちゃんちよつと待って！僕男だから！刹那ちゃんも何とか言って！」

「だいじょうぶや！しょうくんかわええで！」

「ごめんしょうくん、今のこのちゃんはウチでは止められへんよ」

僕の抗議の言葉に木乃香ちゃんは聞く耳を持っておらず、刹那ちゃんは助けられないと言われた。

「さっそくお着替えやしようくん！せっちゃんも手伝って！」

「う、うん」

「ちょ、ちよと待つて！情けを、情けを〜！」

結局木乃香ちゃんと刹那ちゃんに連れていかれ、女装するはめになった。

〜おまけ〜

「父様〜」

「どうしたんだい木乃香？」

「あのな、ほら隠れとらんと」

「あ！ちよっ！」

父さんと詠春様に見られない様に木乃香ちゃんの後ろに隠れていたが木乃香ちゃんに2人の前に押し出された。

「これは、これは、可愛い子ですね」

「ああ、でも翔はどうした？此処にはいない様だが？」

「なに言ってるんや？この子がしょうくんやで」

「なっ！しょ、翔なのか！」

「うわぁ～ん、父さんのバカ～！」

「翔！待ってくれ！翔～！」

## 外伝 北斗が来る前の話（後書き）

この前色々調べていたら何と！感想を書いてくれた人に返信出来る事に気づきました！（何で今まで知らなかったんだよ自分！）なので感想に一つ一つ答えて行きたいので感想お待ちしております。

次の話で木乃香の溺れた話を書こうと思います。  
では次回もお楽しみに



第11話 溺れてそれから・・・（前書き）

今回も文章が雑だと思いますが楽しんで見て下さい。

## 第11話 溺れてそれから・・・

木乃香ちゃんと刹那ちゃんが溺れた。

昼過ぎの修行の休憩中に父さんから伝えられた。

「・・・・・・・・なっ！父さん！その話は本当ですか！木乃香ちゃんと刹那ちゃんは無事なんですか！」

最初は何を言ったのか理解できなくて、少し硬直した後に父さんに詰め寄った。

「・・・・・・・・ああ、幸い命に別状はないらしい」

「・・・・・・・・そうですか・・・・・・・・父さん、明日は木乃香ちゃんと刹那ちゃんの様子を見に行ってもいいですか？」

一刻も早く木乃香ちゃんと刹那ちゃんの様子が見たくて明日本山に行ってもいいか父さんに聞いた。

「ああ、明日の朝早くに出発にしよう」

父さんは僕の気持ちがあったのか、朝早くに家を出ると言った。

~~~~~

次の日、いつもは朝は修行時間だが、今日は朝の修行わしないで本山へ向かった。

そして本山に付くとすぐに木乃香ちゃんと刹那ちゃんの所へ行った。

ダン！

「木乃香ちゃん！刹那ちゃん！大丈夫！」

「あ！しょうくんおはよう」
ズテン！

木乃香ちゃんの名前を叫びながらおもいつき襖を開けた先に居たのは、こつちを振り返り元気に挨拶する木乃香ちゃんだった。自分が考えていた事と全然違い思わずっこけてしまった。

「イテテ．．．．．木乃香ちゃん無事だったんだ．．．．．。まあ木乃香ちゃんが無事だった事はわかったよ．．．．．。ところで刹那ちゃんはどうしたの？」

「．．．．．せつちゃんな、剣の稽古で、今日は道場の方に居るらしいんよ．．．．．」

刹那ちゃんに断られた時を思い出したのか、木乃香ちゃんは少し寂しそつに言った。

「．．．．．まあ、一日くらい遊べない日もあるよ、刹那ちゃんもこれからずっと遊べなくなる事なんか無い筈だから」

流石にこの暗い空気で遊んでも楽しく無いので、木乃香ちゃんを励ました。

「．．．．．そつやね！きょうはむりだっただけやな！」

「そつだよ木乃香ちゃん、今日は刹那ちゃんの分まで遊ぶから、ね

「！」

「うん．．．．．ほなさっそく遊ぼうしょーくん、まずはしょーくんに着物を着せないとあかな」

「えっ！木乃香ちゃん遊ぶのは良いけど、何で着物に着替えないといけないの！」

「えゝせつちゃんがない分しょーくんで遊ぼうと思ったんよゝ、前のしょーくんとってもかわえかったえゝ」

「いやいやいや、僕は男だよ！女の子の格好をするのはおかしいよ！」

「えゝ！しょーくんさっきせつちゃんの分まで遊ぶって言うのは嘘やったんか？」

「いや、遊ぶって言ったけど、女の子の格好をするって言ってないし．．．」

「嘘やったん？」

「．．．．．喜んで着替えます」

木乃香ちゃんが少し涙目になり罪悪感がひしひしと伝わってきて結局女装するはめに。

その後は女装したまま帰るまで遊んだ。

第11話 溺れてそれから・・・（後書き）

この小説の投稿スピードを大体周ーにして行きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3560p/>

魔法先生ネギま！～屍の主～

2011年5月14日23時26分発行